

旅への思い

——芭蕉と『おくのほそ道』——

ひらいずみ

平泉

(口語訳)

藤原氏三代の栄華も、長い歴史から見れば一眠りのようにはかなく消え、平泉館の南大門の跡は、一里ほど手前にある。秀衡の館の跡は田野になり、彼が築いた金鶏山だけが昔の形を残している。

まず、義経の館であった高館に登ると、北上川が眼前に流れているが、この川は南部地方から流れてくる大河である。衣川は、

秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居館であつた和泉が城の周りを巡つて、高館の下で北上川に流れ込んでいる。秀衡の次男の泰衡ら藤原一族の旧跡は、衣が関を間に置いた向こう側にあつて、南部口をおさえて蝦夷の侵入を防ぐためのように見える。それにしても、義経が忠義の家臣をえりすぐつてこの高館にこもつて戦つたが、その功名も一時の短い間のことで、今はその跡はただくさむらとなつている。

「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」
と杜甫の詩を思いつつ、笠を敷いて腰を下ろし、いつまでも懐旧の涙にくれていた。

夏草や兵どもが夢の跡